

『雅歌』『盛装』『天使』における  
「純粹小説論」の實踐  
—横光利一にとっての外地「台湾」の視点から—\*

謝惠貞\*\*

一、はじめに

1930年代、プロレタリア文学崩壊後、日本の文壇は混沌たる模索期である「文芸復興」期を迎える。その中で議論を率いた横光利一は、1935年に有名な文芸論「純粹小説論」（『改造』1935.4）を発表した。この議論は大衆文学と読者を奪い合う時代を背景にしており、リアリズムの改革ならびに読者のレベル向上を掲げ、日本文壇に多大な影響を与えた。注目に値するのは、横光がこの論文を書いたのが、植民地である台湾や京城などの地ではじめて新聞小説「天使」（1935.3.1-7.7）を連載した時期であったことである。横光は後日「台湾の記憶」（『台湾日日新報』1938.5.1）の中で、連載中の台湾への想像を回想している。それまでの新聞小説の作者の多くは純文学陣営に軽視されてきた大衆文学者であった。純文学大家の横光

\* 小稿で言及する『定本横光利一全集』未収録隨筆などは、拙稿（2012）で研究成果の一部として紹介したことを断っておきたい。

\*\* 文藻外語大學日本語文系特任助理教授。

利一が新聞小説というジャンルの実践の場として外地「台湾」を選んだことは、実に興味深い。

また、「盛装」（『婦人公論』1935.1-11）は彼の左翼運動に対する共感を表した作品だが、そこには植民地「台湾」が登場し、「台湾」が社会の周縁を生きる人々にとっての“踊り場”的役割を担う場、近代的理性（道長）と対比される修辞として捉えられていることが分かる。「天使」と創作時間が重なる「盛装」（『婦人公論』1935.1-11）における「台湾」の登場には、どのような意味があるのだろうか。

小論は、横光が日本文学の新しいジャンルの創生を模索していた時期に書かれた、「天使」（『台湾日日新報』に連載）、「雅歌」（前半は『東京日日新聞』・『大阪毎日新聞』1930年11月8日～12月28日夕刊、後半7回は『文芸春秋』1932年5月～11月に掲載）、「盛装」などの恋愛小説において、台湾が地理上かつ記号上で果した補助線としての機能の解明を試みる。

## 二、「純粹小説論」における新ジャンルの実験

### （一）日本文壇の文芸復興

1932年から33年にかけて、台湾島内、日本内地を問わず、台湾新文学の文芸誌が盛んに創刊された。その背景として、内地文壇における文芸復興の影響がしばしば指摘されている（陳芳明 1998、下村作次郎 1999、趙勳達 2009）。台湾新文学運動の発生は社会運動と不可分の関係にあり、両者の影響関係の研究は重要であるが、内地における文芸復興期（1932年後半～1936年）に新たに台湾新文学に参画した台湾作家たちを考える際には、同時代の左翼陣営だけでなく、より広く日台文壇の動向を参照する必要もある。

例えば佐々木基一は1950年代にすでに、「文芸復興期の問題」で、芸術派陣営・左翼陣営それぞれに焦点を当てた、平野謙と中野重治・窪川鶴太郎の文学史観を紹介している。

平野謙は旧プロレタリア文学者とモダニズム系の文学者をすぐれた文学創造という一点において統合しようとした「文学界」の役割のなかに、ファシズムに対する共同戦線と、自然主義以来の既成文学に対する共同戦線の可能性をみている。これに反して、中野や窪川鶴太郎などプロレタリア文学の主線に位置する人は、明治・大正の既成文学者の復活、それとプロレタリア文学者との共同のなかにこそ、市民的批判精神の伝統を正当に受けついだ反ファシズムの思想戦線樹立の可能性も含まれていると考えたのである。（佐々木基一 1958：9）

共同戦線をモダニズム系＝芸術派である『文学界』と組むか、既成文学者と組むかの違いこそあれ、ファシズムに抵抗するプロレタリア文学者の統一戦線志向については、1950年代にすでに明確に指摘されていたのである。

ではなぜこうした統一戦線が生まれたのか。周知の通り、内地では文芸復興前夜にはプロ派と芸術派とが対抗していたが、ナルブ解散に伴い、その緊張関係も緩んでいった。また、文芸復興とともに、1934年は「転向文学開始の年」（野村喬 1962：41）となり、その主流は「そのまま日本文学の原型たる『私小説』に必ず接続し、その作法をふかぶかと呼吸」（野村喬 1962：46）したと言われている。これに対し、反自然主義のプロ陣営からはたちまち批判の声が上がった。

1935年前後にはすでに、転向文学の私小説化（心境・身辺小説を含む）を危惧して社会主義的リアリズムを唱える以外に、芸術派の技法に打開策を求める動きも出てきた。一見それは、純文芸の隆盛のようにも見える。しかし、全般の状況を考えれば、大衆文学隆盛に対して、純文学の失地回復のため、プロレタリア文学派と芸術派が呉越同舟して純文学統一戦線の構築に向かったため、両派文芸理論の相互浸透を可能にする状況が整ったのだと考えられる。それでは、プロレタリア文学作家とモダニズム作家の間で、どのように「統一戦線」が生まれ、またどのように文学理論が相互浸透し、どのような戦略が最終的に共有されたのであろうか。

まずは相互浸透の舞台となる『文学界』について見てみたい。そこでは、五・一五事件や二・二六事件による軍国主義化が、「ヒューマニズムを抛りどころとして、ファシズムに対抗」すべく、左翼文学者と純文学者を連合させたのであり（田中保隆 1981：17）、この連合こそが文芸復興期の「最大公約数」だと評されている（中村光夫・白井吉見・平野謙 1967：389）。1933年10月に小林秀雄、川端康成、武田麟太郎、林房雄らが結集して創刊した『文学界』は、まさに文芸復興の象徴であったのだ。次に、『文学界』に集まった文学者たちが、いかに文芸復興以前から持っていた問題意識を、この時期の気運に対応させたかを探求したい。

## （二）横光利一「純粹小説論」とプロレタリア文芸への注目

文芸復興のもっとも熱心な提唱者の一人は「転向」作家と呼ばれる林房雄だといわれている（佐々木基一 1953：30）。

山本芳明が、林房雄は「純文学」でもう1度大衆化運動を起そ

うとしていた」と論じているように、1920年代にプロレタリア文学者内で「芸術大衆化論争」が盛んになった時、林は評論「プロレタリア大衆文学の問題」で形式の探求に注目していた（山本芳明 2010：55）。また、「大衆」との関係において、林と貴司山治は自ら大衆に近づくという立場に立ち、蔵原惟人および小林多喜二と対立した（林淑美 1988：42）。日本で展開された芸術大衆化運動について、栗原幸夫と林淑美は共に、大衆は論者たちにとって受け手としての役割が大きかった（栗原幸夫 2004：256、林淑美 1988：47）と述べる一方で、それが30年代の各論者の都合による「想像的一枚岩」であることも指摘している。

次に、このプロ陣営の動きを踏まえつつ、文芸復興の代表的なイデオロギーとしてあげられる横光利一「純粹小説論」（『改造』1935.4）と小林秀雄「私小説論」（『経済往来』1935.4）を見てみたい。いずれも時勢に対するのみならず、左翼文学者に対する自発的な対話の言説である。プロレタリア文学の死角であった「思想の心理と個性の問題」を早くから探求してきた2人は、「私小説」「心境小説的リアリズムへの反発」と「読者大衆への注目」を中心に提言している。

たとえば、窪川鶴次郎は「文芸思潮の一課題—創作方法における大衆の問題」（『文藝』1937.11）中で述べているように、「日本の純文学が、読者を意識しはじめてから、既に二年以上になる」といい、また『純粹小説論』に傾倒し、「この主張の注目すべき点は、そのみに止まらない。即ち読者に対する自覚といふことだ。これは純文学が、読者に対する自覚の上に立つて、新たな方向にむかは

うとする努力を始めた、最初の時期における代表的な主張であつたのだ」(林淑美 1988:45)と評している。

ここで、筆者が注目したいのは、プロ派芸術派を問わず、両派が同時に読者問題に注目した理由、1927年に起こった円本ブームと大衆文学などのメディアの資本の拡大、教育の普及、読者層の増加などである。佐藤卓己はかつて、大衆文芸のメディアがいかに読者を獲得したかという構造を解明している(佐藤卓己 2002:19)。

そもそも文芸復興運動においては、すでに1932年、広津和郎と直木三十五の間で、「純文学飢餓」論争が繰り広げられていた(平浩一 2007:538)。読者を大衆文学に奪われ、『新潮』一誌しか商業文芸誌が存在せず、純文学作家たちは発表の場を失ったことにより(平浩一 2008:129)、文字通りの死活問題に直面していた。『行動』『文芸』をはじめとする多くの商業誌の創刊は、文芸復興の動向、とりわけ純文学の経済問題に深く関係していたのである(平浩一 2008:130)。

横光利一が提唱した「純文学にして通俗小説」という「純粹小説」は、まさにこの経済問題の打開策であった。林淑美によれば、「プロレタリア文学において一貫した盲点であった、思想の心理と個性の問題をそれぞれ早くから追及していた横光や小林らが、この割れ目に食い入って、文芸復興期の代表的イデオログになつた」(谷沢永一 1962:108-109)という。

横光はかつて「純粹小説論」で具体的に「偶然性」を描写する重要性を述べている。

純文学とは偶然を廃すること、今一つは、純文学とは通俗小説

のように感傷性のないこと、とこれ以外に私はまだ見ていない。……自意識という介在物があつて、……恰も人間の活動をしてそれが全く偶然的に、突発的に起つて来るかのごとき観を呈せしめている近代人というものは、まことに通俗小説内に於ける偶然の頻発と同様に、われわれにとって興味溢れたものである。しかも、ただ一人にしてその多くの偶然を持っている人間が、二人以上現れて活動する世の中であつてみれば、さらにそれらの偶然の集合は大偶然となつて、……その面白さのままに近づけて真実に書けば書くほど、通俗ではなくなつたのだ。……私は目下現れているさまざまな文学問題に触れつつ廻り道をして純粹小説に関する覚書を書きすすめて来たが、……私は、自分の試みた作品、上海、寢園、紋章、時計、花花、盛装、天使、これらの長篇制作に関するノートを書きつけたような結果になつたが、他の人々も今後旺んに純粹小説論を書かれることを希望したい。〔下線は引用者による〕

また、横光利一は1934年12月に『婦人公論』で発表した「作者の言葉—『盛装』」で以下のように言明している。

小説といふものは、読者と共同製作しなければ、良いものは出来ないとヂイドは云つてゐる。これはまことに至言である。私の頁の読者は私にのみ編纂を任しきりにせられないことを希望したい。

彼らの関心は、『文学界』にも台湾や満洲文壇への関心として反映され、小林秀雄は「文学界後記」(『文学界』6巻1号、

1939.1)で「『文学界』が満洲での販売部数が少ないにも係らずよく読まれてゐるのは意外だつたし、嬉しかつた」と述べている。また、林房雄はコラム「内輪話」と「同人雑記」（『文学界』7巻6号、1940.6）で『台湾芸術』2号の印刷部数は2,000部で、創刊号は百部しか残っていないという逸話を特に紹介している。後年の例ではあるが、これは台湾文学自体への関心の盛り上がりを示すと同時に、林にとっては読者の獲得と市場の拡大こそが「純文学」の緊急の課題と意識されていたのだ、ともいえよう（山本芳明 2010:50）。

以上の検証によって1つの疑問が解明できる。横光が1935年に発表した「純粹小説論」とプロ陣営の1920年代の芸術大衆化理論の唱和の背景は、両陣営の文学出発期まで遡るということである。当時は“敵対する理解者”として、理論面と表現面でお互いに浸透しあう関係にあった。例えば、横光と蔵原惟人はすでに1928年から「形式主義論争」を交わし、理論の深層に「問題意識／無意識を共有していた」（位田将司 2007:51）と指摘されている。1933年12月『文芸春秋』主催の「文芸復興座談会」において、横光は正直に福本和夫の理論に影響を受けたといい、「純粹小説論」で福本の「弁証法」を読み取ろうとしたと告白している。

### 三、『台湾日日新報』に純粹小説「天使」を連載する必要性

#### （一）『台湾日日新報』における「天使」と横光利一の紹介

上述した横光の提案から分かるのは、その趣旨が文芸復興期において大衆文学が純文学の読者を吸収してしまうことを憂惧する作家

達への提案であるということである。現代文芸でいう、いわゆる読者の参与を重視する開かれたテキスト（open text）と類似する概念であろう。ここで、詳しく追究する必要があるのは、読者の参与を重視する純粹小説という新しいジャンルの実践は、見えない読者の読みが関与しているため、確定できぬ要素が実に多いということである。

以前の横光利一研究においては、「天使」は、日本統治下の朝鮮で1935年2月28日～7月6日の『京城日報』に連載されたのが初出であると認識されてきた。しかし、掛野剛史が指摘したように、「天使」は「土曜会」という新聞通信社を通じて、『京城日報』『台湾日日新報』『名古屋新聞』でほとんど同時に掲載されていた新聞小説であった（掛野剛史 2006）。楊達は『文学案内』1巻5号（1935.11）「台湾文学運動の現況」で「今、ただ『台湾新聞』に一週間に二回文芸版を開放し、短編の作品、笑い話、評論、詩を掲載しているのみ。『台湾新民報』にはただ不定期に詩文を掲載している。連載小説となると、ほとんど全部文芸通信社の天下で、『台湾新民報』朝刊の連載小説と夕刊の漢文連載小説だけが島内作家の投稿を受け付ける」（彭小妍 1998:393）と述べている。戦前の日本には「文芸通信社」という名の会社は存在せず、楊達は国内外の新聞や雑誌に小説などを供給する会社を総称したと推察できる。横光利一は、「土曜会」を通して、確実に数多くの外地読者を獲得したのである。

掛野の分析によれば、『京城日報』と『台湾日日新報』紙上の「天使」を宣伝する文章では、掲載地地名の書き換え以外、殆ど違いが

なく、作家はこのような新聞連盟を通じた複製によって低コストで読者を獲得できたとしている。

だが、掛野の調査は連載開始前の宣伝用文章に限られている。そこで、筆者は連載前に『台湾日日新報』に掲載された宣伝文や評論のすべてを調査した。そして『定本横光利一全集』に未収録の資料を新発見することができた。それらの文章には、横光と盟友たちが外地や地方の新聞で、いかにして読者の読みを誘導したかという痕跡を見出すことができる。

まず、掛野によると3紙に掲載されほぼ内容を同じくするとされた宣伝文や評論を見てみよう。1935年2月21日第7版で編集部が「本紙朝刊を飾する／次の小説豫告／“天使”／横光利一氏作／宮田重雄氏畫」とした3つの文章を紹介する。比較的読者の立場に近い編集部からは、「天使」に対する純文学作品への期待が綴られている。

横光利一氏は、純文学の最高峰を占める人として読者の絶賛を浴びてゐるが、今度はわが社の熱誠なる依頼によつて、ここに最初の新聞連載小説を執筆することになつた。……しかも大衆小説ならざる純文学的労作を発表するとは、正しく日本新聞小説史上特筆すべき出来事であり、且つ亦わが社の最も誇りとするところである。……〔下線は引用者による〕

次に、横光「作者の言葉」が載せられているが、1934年4月に「純粹小説論」を発表する以前のものであるが、人間の心の移りやすさを描く意図と理由が綴られている。

どんなものが出来るか私には分からないが、人間の心といふの

は今までの人間の考へてみた通りには、動かぬものだといふことが、だんだん近ごろの人々に分かつて来た。つまり、云い換へると、人間の心は、なかなか分からぬものだといふことだけが、はつきり分かつて来たのである。それなら、一番に人間の心の動きに重さをおく、小説といふものも、当然変わらなければならぬ。小説も、毎日毎日、銀行や飛行機のやうに、進歩してゐるものであるが、私の作も、一層進歩したものにしてみたいと、願つてゐる。挿絵の宮田さんは医学博士であられるので、御多忙のところをわざわざ願ひして出て貰ひました。〔下線は引用者による〕

菊池寛による「菊池寛氏談」は以下の通りである。

横光君が長編小説を書くことは非常に意義のあることだ。横光君は昨年あたりから、新聞小説を書きたいといふ気持をもたれてゐたから、相当な抱負も自儘もあるに違ひない。台湾日日新報がこの純文学の第一人者に、最初の新聞小説を書かしたことは非常に手柄である。……読者諸君も普通の新聞小説などに求めるやうな、卑俗な興味は、しばらくおいて、横光君の滋味溢れるやうな描写と、その快い会話のリズムを味わつてみると、必ず面白い筋が転回されるものだ<sup>ママ</sup>と自分は信じてゐる。

これ以外では、川端康成が『名古屋新聞』で横光の創作意図を強調しており、明らかに読者の読みを意識している様子が窺える。

純文芸の最高峰に聳え、また指標とも仰がれてゐる横光が、初めて新聞の連載小説を書くといふことは、……甚だ意義深い企

てであると信じる。

一口にいへば、この作品「天使」において、試験されるのは、作者横光でなくて、実は読者諸君なのである。これまで、新聞小説は一般に低俗と見られ、純正芸術的立場からは、軽侮され勝ちであつた。これは作者の罪でもなく、編集者の罪でもなく、実に読者大衆の罪であつた。……またこれまで、いはゆる純文芸が大衆読者に親しまれなかつたのは、作者側の罪であつた。

「天使」は、この二つの罪を同時に消滅させるがために、芸術の神に送られた、まことの「天使」であらう。……この「天使」において、諸君はこれまでの芸術的に軽蔑された読者から尊敬された読者に向上したことを、十分考へて貰ひたい。……高い芸術味とともに大衆的な興味も伴ふに疑ひない……。〔下線は引用者による〕（川端康成 1982：125）

以上のように、横光の「純粋小説」概念を受け継ぎ、読者に自らの興味レベルを高めておこうと訴えた菊池寛と川端康成は、横光と同じ論理を共有している。横光作品の通俗性を批判をせず、読者のレベル向上を求める論理を前面に押し出し、それによって「天使」の読み応えを保証している。

ここで、横光の恩師と盟友達は、なぜ、口をそろえて読者に卑俗な興味を捨てるように言い、「天使」は横光のはじめての新聞小説だと公言するのか、という疑問を禁じ得ない。

実は、「天使」の前に、横光には新聞に小説を連載した経験がないわけではない。しかし挫折を味わったのである。年譜に記載された全作品の初出によれば、「寝園」という彼の純粋小説群の初期作

だと思われる小説の前半は、1930年11月8日から12月28日まで『東京日日新聞』・『大阪毎日新聞』夕刊に連載されている。ところが後半は、1932年の5月から11月の『文藝春秋』誌上に連載された。作品は、1932年11月に前篇に修正を加えて中央公論から出版されている。その期間内である1933年7月1日から8月19日の『報知新聞』に連載された「雅歌」も決して横光が定義した長編純粋小説のあるべき姿には当てはまらない。

「寝園」による新聞連載初挑戦が挫折に終わり、2度目の「雅歌」も横光本人は「純粋小説論」の中で、純粋小説に分類していない。川端康成が「天使」は横光のはじめての新聞小説だと公言する。これらのすべての証拠が、「天使」がなぜ外地と地方都市の新聞で連載したのかという特殊な意図を指向している。そのため、これは読者の興味を引きつける一種の方法だと推測できる。小説の内容を調整しつつ、連載期間に作者にまつわるエピソードを提供することも方法の1つである。たとえば、「天使」連載開始12日目の、1935年3月12日付『台湾日日新報』第7版に、編集部は「文壇早耳／横光利一氏のカンフル注射」を掲げ、作家の創作生活を点描し、読者との距離を縮めようとしている。

あまり健康でもないのに、一作毎に離心鑲骨の苦心を重ね目下本紙に「天使」を書いてある横光利一氏、仕事をはじめると、そばから球になつてゐるチーズを離さない……居催促をしてみた某誌の記者が……心配をすると「のぼせることはのぼせるけれども、こいつをやらなければ疲れてしまつてね、カンフル注射みたいなもんであるよ」

連載開始3ヶ月目に入ると、旧プロレタリア評論家、江口渙の純粹小説論に言及した文章が転載され、純粹小説の理論的基礎が紹介された。1935年5月31日付『台湾日日新報』第4版の「純粹小説と通俗小説上」では次のように述べられている。

日本の新しい時代的苦惱の一つが「純文学」を通して文壇的に現はれたのがすなはち、こんどの純文学における「偶然性」の要求となつたのである。……作家の作為になる「偶然」は如何に巧みに仕込まれておやうとも、文学の内容を出鱈目にし、卑俗化する、だが困ったことに、作家の作為による「偶然」は、教養の低い読者に対しては、しばしば自然の「偶然」と同じぐらゐ、魅力を与へる危険がある。文学をもつて全然營利的商品と伝へてゐる資本家や、通俗作家大衆作家が教養の低い読者大衆の中へひろくその作品を売り込んで出来るだけ多くの利益を上げるやうとするためには、常にこの作為による「偶然」の手段に訴へて、読者を瞞着しやうとする理由がここにあるのだ。

〔下線は引用者による〕

日を待たず、1935年6月5日付『台湾日日新報』第6版には、江口渙「純粹小説と通俗小説下」が掲載され、更に進んで読者レベルの向上に対する横光の貢献を賞賛している。

宇野浩二や横光利一などが、たとへその文学を勤労大衆の解放と人類社会の歴史的発展のために役立てるだけの勇氣がなくとも、少くも読者大衆を封建的な貴族主義の高貴さの方へ引き上げようと努力するのを見ると、前のブルジョア通俗作家よりも、

後のブルジョア芸術作家の方に、私は遙かに好意が持てるのである。〔下線は引用者による〕

さらに、連載終了後の1935年11月16日付『台湾日日新報』第7版で、詩村映二が「横光利一氏の『天使』を読む」という作品評をしている。

長編「花花」の機構が発展したものに、台湾日日連載の「天使」がある。「花花」には見られなかつた人間心理の美しい変異が巧に捕へられ、愛情の眞の在り様が美しきまでに高められてゐる。元来が新聞小説として書かれただけに、事件の進め方、まとめ方に無理があるのは否めない。……人がこの小説を背徳の書と呼ぶか否かは問はない。このやうな風評が「天使」の価値を左右するものとは思へないし、……卑俗性が（悪い意味にも良い意味にも）貞子の形を取つて現はれてゐることである。この卑俗性と呼ばれるところのものが、所謂横光利一が純粹小説を面白く読ませる普遍性となるではあるまいか。純粹小説と云つても悪ければ、新聞小説と言ひ替へてもようが、横光利一の場合はむしろどちらかにあつてもさし差支へないやうな気がする。

横光利一氏の「天使」は尾坂崎士郎氏の「人生劇場」片岡鉄兵氏の「花嫁学校」武田麟太郎氏の「銀座八丁」滝井孝介氏の「無限抱擁」と並んで新聞小説の佳編であり、氏の「純粹小説論」の試みとしても面白いものであらう。〔下線は引用者による〕

村詩映二によれば、「天使」の作者は純文学者横光であったため、



「天使」は純粋小説ともいえるし、新聞小説ともいえる。村詩の指摘は、端的に作者の意図と読者の解釈の間の不確定性を示唆している。また、その不確定性は、読書行為の前に読んだ解説の誘導によって改変されるものである。

連載終了後、さらに3年の歳月が過ぎてから、横光本人は、1938年5月1日付『台湾日日新報』第9版の「臺灣の記憶」（図1）で次のように追憶している。

昭和十年三月から、私は「天使」を書いた。あの当時は台湾へ出る船は三日一度で、その一度が波が荒れると、五日目になり、六日目になるとのことであつた。東京から送らねばならぬ原稿も、それ故、書き溜めをしておかねばならぬのである。これは私に苦痛であつたが、日光の強烈な、熱帯の植物に満ち溢れてある台湾を、頭に浮かべて筆を取るのも、なかなか私には楽しみなことだつた。私はまだ台湾へはいつてみたことはないけれども、この地の美しさはほぼ想像がついてゐる。先年外国へ行く時、台湾の沖にさしかかつて、地平線を見ながら、あのあたりが台湾であろうか、このあたりであろうかと、度度甲板から眺め望んだ。その日、そのとき、丁度二・二六事件が起きてゐる最中であつた。また、この沖では先年早蕨が転覆した。その時の艦長、門田健吾は私の中学の時の親友であつた。門田のことを思ふ度に、私は台湾海峡の青い底に渦巻く<sup>ふか</sup>鱻の口が、眼に見えてならない。〔下線は引用者による〕

この文章は『定本横光利一全集』に未収録の新発見資料である。上述した事件は、横光が1936年2月から8月まで、『東京日日新聞』

の特派員として、ヨーロッパに赴く途中の出来事であり、「歐洲紀行」<sup>1</sup>にも記録されている。この文は、台湾の熱帯風物への想像を要約したのみならず、日本の軍政局面の変化をめぐる記憶も重ねられている。

## （二）『天使』における「純粋小説論」の實踐とその反響

このように読者の参与を強調し、様々な手段を尽くして『天使』鑑賞の際に高い心構えが必要だと読者を誘導する一方で、『天使』はどのように『純粋小説論』で主張した通俗性と偶然性を実践したのか、また台湾ではどのような反応を引き起こしたのか。

この疑問を解答するためにまず注意すべきは、菅野昭正による指摘であろう。菅野は、『純粋小説論』は『天使』連載中に発表されたため、「論と実践の距離が、他のどれよりも縮められているのではないか」としている（菅野昭正 1991:204）。自然主義式のリアリズムに反発する作品『天使』において、たくさんの偶然と一致が次々登場する設定は、横光の理論の實踐だと言えよう。

『天使』の粗筋はおよそ次のようなものである。

主人公寺島幹雄と妻の京子は、寺島の父親の事業のために政略結婚で結ばれた。夫婦関係はむつまじくない。幹雄は腸チブスで入院、看護婦榎村貞子の細心なる看護を受けて彼女への好意が芽生えた。幹雄はそこで京子の昔の恋人であり、今は自分の友人でもある明石に、離婚の意志を打ち明けた。しかし貞子は幹雄の妻に配慮して、

<sup>1</sup> 『文藝春秋』（1936.5-9）、『東京日日新聞』（1936.8.2-1937.1.14）〔但し、途中中断有り〕、『改造』（1937.4）。

幹雄の執拗な求愛を固く拒み続ける。すでに妻を愛しておらず、また貞子の愛を得られぬ幹雄は、退院後、貞子の妹雪子に対して興味を示しはじめる。貞子はそれを知り、幹雄に雪子との距離を置かせるため、自ら幹雄の家に住み込む。次第に、貞子の心には幹雄と結婚しようという意思が生じるが、幹雄は貞子に応えなかった。突然、幹雄は父の命令で、父のホテル事業の経営状況を視察するために奉天に向かう。幹雄は貞子を同行させ視察の旅に出かけ、2人は途中の京城で結婚（性交）した。ところが、2人が奉天に着くと、突然父から電報が届き、幹雄は帰国する。京子の家が破産したのである。そこで幹雄は再び京子と共同生活を始めた。貞子はすべての決定権を幹雄に委ねたが、幹雄の心はすでに貞子にはなかった。

中村三春の鋭い分析によれば、このように二転三転するストーリー展開は、「純粹小説論」を実践するための「構造」であり、この構造の特徴とは、「結婚」を引力に、優柔不断な登場人物の関係をある種の関数に変換させ、それによってたやすく「自意識」と「偶然性」の回路に連結させたということである。ところが、新しい文体は常に理解の困難を持ち合わせるという側面があり、また、理解困難な作品は失敗作と批判されがちである。岩上順一が論著『横光利一』で、「天使」という作品には不可解な個所が多すぎると批判したのもその一例である。

「天使」の不可解性は明白であらう。もつとも、作家横光にとつては、そのやうな「不可解」さこそ描きたかつたところだと言ふかもしれぬ。……が、天使の不可解さは、そのやうな人生の偶然性の不可解さではない。さうではなくて、そこに登場す

人間の行動を説明し証明することの不可能さを「天使」がもつてゐるといふことだ。……それにもまして不可解なのは幹雄の心理であらう。幹雄も亦「寢園」の仁羽や「花花」の伊室や「盛装」の道長と同じ性格の自己喪失者であり、自己傍観者に過ぎないのではないか。仁羽が、伊室が、道長が、接触するすべての女性に惹かれて、その間自己の真に愛してゐるものを発見し得なかつたやうに、幹雄も亦接触するすべての女性に惹かれながら次々に移つてゆく。どこに自己の本心があるかを自ら知らない。……一切の人間の倫理性を捨象して、ひたすら瞬間毎に偶然的に継起してゆく自己の意識だけが彼の行爲を支配する。彼の行爲の原則は、不連続であり断絶である。無連絡であり飛躍である。そしてこれが断続であり飛躍であることが、この作家の信条の上に立つてゐるのである。作家は、無意識に、主人公達の行爲を断絶と無連絡に於てとらへたのではない。反対に、強く意識してさう書いたのだ。さうあるべきだと作家は考へてゐるのだ。〔下線は引用者による〕（岩上順一 1956：101-104）

新しい文体に取り入れた物語の「構造」は、関係関数により二転三転を余儀なくされるが、こうした偶然性による表現は、岩上から見れば、「不連続」と「飛躍」となる。菊池寛と川端康成たちが危惧する読者の読みの1つは、まさに上記引用文から読み取れよう。言い換えれば、下手をすれば、純文学にして通俗小説の新しい文体に対して、読者は「不連続」や「飛躍」を感じ、またそこから恐らく直接「面白くない」失敗作というラベルを貼ってしまうかもしれない。

では、実際、台湾の読者からはどのような反応があったのか。1936年6月7日、東京で「台湾文学当面の諸問題」を議題に、文聯東京支部の座談会が開かれた。「大衆化とレベルの関係」の議論に続いて、読者志向の「小説の面白さ」という議題が提起され、いわゆる純文学の大衆化が議論の的になっている。

劉捷：少々方向を変へて、中央文壇のトピックを二つ三つ俎上に上げませう。「小説の面白さ」論議のそもそもは誰方が提起したのであるか。

陳瑞榮：横光利一の純粹小説から出発して、小説に於ける純粹性、通俗性の論議が起り、林房雄辺りが、小説は皆面白いと言ったことから始まったのである。

吳天賞：今迄の純文学が面白くないといふのでせう。

曾石火：皆何かと云つてるけど、それでは、どういふのが面白い小説なのか、まだ誰も分からないのだ。

翁闢：確か芹沢<sup>ママ</sup>、光治良、中野重治、林房雄等だつたと思ふ。純文学が面白くないのは批評家がさうさせたのだと言ふのである。面白さの問題に関して、島木健作<sup>ママ</sup>在中外商業に書いた「誰のための面白さか」は正論であるね。

吳天賞：僕もさう思ふね。

曾石火：台湾文芸の面白さも、今さつき言つた郷土色とを取入れたからといって、大衆が面白がるといふ訳には行かない。郷土色がなくても面白いと感ずる人もあるでせうし、要するに読者の心理は無視出来ない。読者の心理を考へに入なければ、大衆化は出来ない。又実際、自然の風景や風俗が台湾の現在そつ

くりでも、中に動いてゐる人物が、キネマの中の人物のやうな会話をしたり、そんな風な考へ方をしてゐたのでは、郷土色もないでせう。

吳坤煌：読者が小説の中に自ら最も卑近な生活現実を感じて居れば面白いし、さうでない時は面白くないではないかと思ひる。

〔下線は引用者による〕

会中で話題となった「純粹小説論」は、正に新聞小説「天使」が『台湾日日新報』と朝鮮の『京城日報』に連載されている最中に発表されたものである。換言すれば、30年代の台湾文壇で活躍している台湾の作家達も積極的に「純粹小説論」と対話し、横光とその盟友が伝えようとする理念の基本を把握している。

また、1935年5月4日付『台湾新聞』で伊思井日出夫は「純粹小説に就いて」でこう述べている。

筆者は最早筆をおかねばならない、只こゝで彼横光が真実なるものを求め進んでゆく其過程の一端に於て提唱したる純粹小説に関しては、今後に於る彼の作品をまつより外はない「天使」盛装以降如何に發展し行くかそれは彼に課せられた大なる問題でなければならない。〔下線は引用者による〕

この伊思井日出夫が1935年4月末～5月初め『台湾新聞』に発表した反応は「純粹小説論」を評する一連のもの1つである。この評論とその前後に発表されたいくつの文章が、台湾の「純粹小説論」論争である。楊達も「甚だ愉快だ」を書いて盛んな議論を声援しているが、この論争についての詳しい議論は別稿に譲ることにする。

1935年12月3日、池田敏雄も「蒐集氣まぐれ」『短歌雑誌原生林』で以下のように触れている。

文芸懇話会賞を得た横光利一の「紋章」は通俗文学と純文学の  
堺を狙つてゐると言われてゐる……〔下線は引用者による〕

この文は、直接「天使」にふれてはいないが、純粹小説の概念と横光利一の実践についてはある程度理解しているようである。

しかし、「天使」連載当時、台湾日日新報社で学芸部を担当していた記者、西川満が横光利一と接点を持っていたのか否かについては疑問を禁じ得ない。筆者の調査によると、1940年3月の西川満の同人誌『文芸台湾』第2号には横光利一を含む内地作家の賛助会員名が掲載されている。これらの作家の流派や関係は、中島利郎の研究によれば、早稲田大学時代の恩師の西條八十の紹介を通じてのものである。西條八十はかつて1936年に早稲田大学を中退した横光利一と共に『東京日日新聞』のオリンピック特派員として欧遊したため、互いに親しい間柄だと思われる（中島利郎 2006：93）。

しかし直接の接点を証明する証拠は、現在限られた資料を見渡す限り、西川満自叙伝『わが越えし幾山河』（1983）、および戦後刊行された雑誌『アンドロメダ』のではまったく言及されておらず、むしろ戦後台湾の風習を背景とした「会真記」に夏目漱石賞佳作を受賞した時の横光利一との僅かな接点が言及されているだけである。戦後東京に引き揚げた西川は『アンドロメダ』を創刊し、その1988年10月23日付230号第7版で、「煉獄のころ」という文章で次のように回想している。

「会真記」が、夏目漱石賞の選に入ったのを、たまたま遊びに行った新聞社で知らされたのは、七月十五日である。いろいろな経緯があつたが、最後の投票で、わたしを強く支持してくださった方が、横光利一、武者小路実篤氏、それに林房雄先生であることを知って、深い感謝と満ちたりた思いで秋を迎えた。

（西川満 1988：7）

残念なのは、横光が1947年12月15日に胃潰瘍と腹膜炎のために死去し、夏目伸六編『夏目漱石賞當選作品集』（1948）に選評を残せなかったことである。

以上を総合的に分析すれば、恋愛小説は通俗小説の永久不滅のテーマだと言えるが、横光は恋愛小説を純粹小説に取り入れ、登場人物の行方に対する読者の異なる期待を包容している。男女人物の複雑な恋愛模様や気持ちの定まらなさに関して、「天使」では極端的な実験が行われている。新聞小説の毎日限られた字数制限の中で、「天使」は日付が変わる度に、登場人物の気持ちに180度の動転が見られ、横光が意図的に多様な解釈を許容する開かれたテキストを試みようとしていることが分かる。新しい文体の試みであり、また卑俗だと見られてきた通俗小説に近づこうとする意図から、当時純文学陣営の内部からは、自らレベルを下げているとして憂慮の声が上がっている。また、横光利一自身が実験の成否は、「文学の神」<sup>2</sup>とイメージに関わる問題でもあるとしている。そこで、上に引用し

<sup>2</sup> 当時、横光利一も「純文学の神」と讃えられていた（神谷忠孝 1991：209）。台湾の作家巫永福がかつて留学していた明治大学文芸科の学生も、横光利一に同じ愛称を付けていた（藤川能 1981：58）。

た『台湾日日新報』、『名古屋新聞』紙上で、菊池寛、川端康成は故意に『天使』は横光の新聞小説の処女作であると強調したのであろう。横光と盟友の戦略は、『台湾日日新報』に書き下した、「純粹小説論」実践作「天使」を通して確かに台湾文壇の反響を得たのである。

#### 四、「雅歌」「盛装」における、台湾というシンボル

##### (一)「雅歌」における台湾石油株

「三」で論じた台湾は外地であり、作家横光利一にとっては新しいジャンルの実験場であった。以下で、横光作品中において台湾はどのように表象されているかを分析したい。横光が作品の中で、最初に台湾を描いたのは、1931年の7-8月『報知新聞』に連載した『雅歌』である。

物語は次のように展開する。

夏の鎌倉の海水浴場に、一組の男性鬼頭、坂崎、羽根田、根津、比良が訪ねたことから始まる。5人はキャンプ中にひそかに恋愛をしてはいけない、恋愛しそうになったらグループとして活動するという約束を交わしており、それを「連帯愛」と称し、「連愛会」なるものを結成している。日本石油会社に勤め、同時に株主でもある鬼頭は、結婚しているにも拘らず、出産を控えた妻を東京に放ってきた。根津は医者で、坂崎はとある化粧品会社で脱法系の弁護士を担当している。物理学者の羽根田は他の4人より性格が内向的で、聖書を愛読している。そのため連愛会の会長に選ばれている。しかし、女性達が現れた時、すべてが狂ってしまう。梅子という女性は鬼頭

の元恋人だが、今は比良と仲がいい。比良は毎年夏に必ず女性問題を引き起こすため、梅子はそれが心配で付いてきた。その他の女性、ちか子、仙子、田鶴子の3人は友人同士で、東京から近くの別荘に避暑にやってきて、仙子と坂崎が遠縁に当たるため、男性陣と交流を始めた。結果的に男性全員が、フランス留学帰りのちか子に好意を抱きはじめた。そうした中で羽根田はちか子からの好意に気づかずに、自分の嫉妬に嫌気が差し、東京に帰ると告げる。そこで、ちか子が羽根田の実験室を見学したいと言い出すと、鬼頭は妻を顧みずに、ちか子の案内を買って出る。

その後、坂崎も行動に出て、ちか子の家が告訴されることを知り、急いで仙子の父を通して縁談を申し込んだ。比良の気持ちも梅子にばれてしまい、大喧嘩した末、ちか子の後を追って東京に戻り、ちか子をデートに誘い出す。梅子は失意のあまり、医者根津のアドバイスを受けて羽根田に接近し、勝手に彼の秘書として振る舞いはじめた。ちか子は羽根田に想いを抱いているが、彼からのアプローチがなかなかなく、梅子の積極ぶりに負けるのが怖くなってくる。そこで、実験室で撮った記念写真をもらうことを口実に羽根田を訪ね、もし羽根田がドイツに行くなら自分も同行すると冗談めかす。羽根田が、どうぞと言っただけで告白できずにいると、ちか子は声を上げて泣き始めた。

河上徹太郎は、この小説の基調は『旧約聖書』の雅歌の中の一節から取ったものだと指摘し、「北風よ、起れ、南風よ、きたれ。わが園を吹いて、そのかおりを広く散らせ。わが愛する者がその園にはいつてきて、その良い実を食べるように。」がモチーフであると

する（河上徹太郎 1951：235）。近代的道德観を持つ青年男女に比べて、羽根田は古風である。しかし、近代道德を享受し「幸福にならおうと努力する」鬼頭にとって、中産階級の恋愛生活を支えているのは、植民地の拡張である。鬼頭の植民地台湾にある会社が、その自由恋愛を支える経済力の1つなのである。

「鬼頭は日本石油会社へ勤めてゐる上に、またその株主でもあるので、先日から坂崎に台湾の油田から出る揮発油の話しをしてみたのだ。

そこから出る新しい揮発油の増加が市場の期待相場を高くし始めてみたものだから、いよいよ新しい油田が活動したなら、鬼頭は坂崎に御馳走をしようといふちか子供氣た約束をしてあつた。

「油はまだまだ出さうもないのだ。油が出れば、今頃こんな浜辺でうろうろなんかするものか。」

「ところで、油ゆり君のマダム、まだお産にならないね。」

「うむ、この調子ぢやちか子供も油もなかなかだ。」

そこで一同のものはどつと笑つた。

実際、考へてみれば、彼には悲しむべき材料は何一つとしてなかつた。妻は子供を産む。これも良い。好意を持たれてゐるちか子に自分に好意を持ち返す。勿論、これも十分良い。その上、台湾の石油株が上つていくにいたつては——幸福といふのは、これ以外にどこにあらう。

このフィクションにおいて、台湾石油は幸福のシンボルとして登場するが、いったいそれは事実なのだろうか。当時横光利一が恐ら

く目を通したと思われる1925年の4月21日付『読売新聞』第8版の上では「前途を期待される台湾の揮発油事業／月額九千箱の見込がついた」という記事が掲載されており、また1925年7月30日付第8版には「台湾・苗栗の日本石油の所有礦区から続々噴油／一日三百石で前途多望」とある。いずれも内地日本に台湾石油の将来性を宣伝するものである。「天使」にある「そこから出る新しい揮発油の増加が市場の期待相場を高くし始めてみた」というくだりは、恐らく新竹の錦水坑の揮発油（light naphtha、天然ガス）の大噴出を報道した新聞によるのであろう。1928年11月7日付漢文『台湾日日新報』夕刊第4版には「新竹錦水坑場／俄然大噴揮發油／一晝夜三億立方／為世界稀例壯觀」（図2）という報道もある。

事実、1928年から揮発油の需要が増加していた。同年12月6日付『台湾日日新報』第3版の「三菱の／製油工場建設／揮發油の需要／増進に著目」からわかる。そのため、鬼頭の会社、日本石油株式会社は「天使」発表の4年前から新竹の揮発油を掘り出した後、また錦水第十号井の揮発油を開発しはじめた。これは1930年4月26日付『台湾日日新報』第7版「揮發油採取に／日石も決意／錦水第十號井」（図3）に詳しい。『日本石油史』によれば、1903年日本の宝田石油会社（その後日本石油と併合）は、新竹州公館庄の鉦坑を開削し、28年11月以降は、錦水油田8号井、1号井、10号井から続々と揮発油の噴出が記録されている。また、錦水油田の揮発油の供給が台湾島内の需要を上回るため、定期的に山口県の下松製油所に運送されていると述べている（日本石油史編輯室 1958：340-343）。

さらに、1930年10月8日『台湾日日新報』第3版「本島の鑛産界／石炭は減少、揮発油は増産／鑛の移出は躍進的增加／本島の出炭」（図4）という報道からも分かるように、揮発油は1929年以降増産されている。そのため日本石油株式会社の株券も見通しが明かった。1931年1月22日付『台湾日日新報』第3版には「株式春氣配良好／製糖株は業績樂觀／日石油と電力株も好勢／揮発油」（図5）という明るいニュースが載っている。竹本伊一郎（1932）に記載されている日本石油株式会社の資料（図6-1、6-2、6-3）が示すように、1931年の3月から9月間の本期純益金は859,725円から1,403,298円に増えている。

植民地に対して横光利一が如何なる観点を持っているかに関して、黒田大河は『旅愁』という作品において横光は他者「支那」と対話の可能性を見出だしたと指摘している。しかし「朝鮮のこと」「青い石を拾ってから」で朝鮮の「他者」性を表象できたのは、異なる言語体験によるのである。だが、同化政策の実施に従い、横光の心の中で朝鮮は「異国」から次第に「内地」になりつつあった。姜素英は黒田の論点を受け、「文明国」日本を浮き彫りにするために「野蛮国」韓国の表象を横光が創り出したと指摘し、その中で韓国の「他者」性を完全には排除できぬという同化政策の限界を暴露してもいる。日本帝国主義の植民政策に従い、一方では「朝鮮停滞論」を通じて差別を行い、一方では「日鮮同祖論」を通じて同化を推進する。1922年に鉄道技師の父梅次郎の仕事関係で、横光はかつて朝鮮旅行をした。その体験を旅行者の気分で綴っているが、戦時となれば、朝鮮は「内鮮一体」の「内地」に変わるのである。

しかし、朝鮮とは違って、横光の生涯で、台湾の植民地統治についての直接の発言は殆どなかった。佐藤春夫などの作家との対談「作家ばかりの座談会」記録の中では、横光は台湾にいわゆる「支那人」民族が居住していることをある程度認知している<sup>3</sup>。黒田大河は、外地朝鮮或は支那、ヨーロッパは横光文学における参照点としての「他者」の役割を果たしている。この意味では台湾は横光文学の中で「他者」と称することすらできなからう。但し、台湾は足を踏み入れたことがなかったためか、「雅歌」などの作品での台湾描写の多くは現実を反映しているのである。

「雅歌」に関して言えば、『聖書』を信仰する羽根田が持つ「他人に破損を与えぬ」という古来の道徳に対して、鬼頭、比良、根津、坂崎たちが追求する「幸福にならうと努力するのが、新しい道徳」は植民地主義に通じる本質を持っているのではないか。結末まで、ずっと他人の幸せを剥奪したがる羽根田は、運命の神のご加護を受け、ちか子自らの告白を受ける。横光は『旧約聖書』を基に「雅歌」を書き、また発表後の随筆「現代の青年」で、当時の青年の「自意識過剰」（横光利一 1982：185）を批判している。横光が現代青年の新道徳観に疑問を持っていることが窺える。例を引けば、新しい道徳が欲求する対象として、台湾石油の開発も同様に植民地から搾取する手段となり、横光の分身である羽根田に軽蔑されたのだと思われる。ここから横光利一にとっての台湾は、植民地のシンボルとしての意味が表象する対象としての役割以上のものであるといえよう。

<sup>3</sup> この対談は『文芸春秋』1937年1月所収だが、本稿では横光利一（1983：410）を参照した。

## (二) 「盛装」にみる台湾に逃亡したマルクスボーイ

1935年の1月～11月『婦人公論』に発表された「盛装」の粗筋を以下に記そう。

主人公は高等遊民の高槻道長である。その父の高槻房方が病に倒れたため、道長とその妹栄子それぞれの結婚に父の情婦の立川菊枝が干渉をしようとする。菊枝は自分の長女桂子を道長に嫁つがせ、また栄子にフランス帰りのデザイナー兼ピアノ教師の橘真吉と見合いをさせようとしている。ところが、桂子は橘真吉に好意を抱きつつ、道長と婚約をする。栄子の元恋人の我孫子久平は、昔マルクス主義を信奉していたため、運動参与の末弾圧されて南方の外地に亡命し、その間スマトラの材木業などに従事していたが、突然日本に戻り、再び高槻家に現れる。さらに、久平は昔情事を交わした菊枝と栄子に、道長とその父の愛人お露の間に朝子という子があるという秘密を暴露する。栄子は秘密裏に朝子を世話したいため、久平との関係を回復しようと思うようになる。お露の死後、道長は桂子に私生児の存在を打ち明け、2人の婚約を取り消す。しかし、その一方で栄子への手紙で、実は朝子は父の子供だと告白する。すべては父に捨てられたお露を救うための偽装だといい、桂子の妹鈴枝にこの事実を告げてプロポーズすると手紙で語っている。栄子は道長の美しい心に感動し、彼と鈴枝との結婚に協力しようとする。ところが、房方の死んだ夜、久平は鈴枝を誘拐して行方をくらます。その後久平は道長に宛てた手紙でお金を無心し、道長が栄子に話したことはただ鈴枝を宥める恐ろしい手段だと咎めた。小説の終りで、道長は1人で榛名湖に気晴らしに出かける。道長を心配する桂子がすぐ後を

追う。桂子を前に道長は、朝子は自分の子ではないと告白を翻す。そのため、桂子の心はまた真吉と道長の間で揺れはじめる。

前に引用した「作者の言葉—『盛装』」で横光は次のように告白している：

小説といふものは、読者と共同製作しなければ、良いものは出来ないとヂイドは云つてゐる。これはまことに至言である。私の頁の読者は私にのみ編纂を任しきりにせられないことを希望したい。……私は呈出した問題に關して、様々な読者の意見な浴びることがあるやもしれないと思ふ。そのため、突如として私は、作中の人物に向つて、読者の意見な作中の他の人物を代表させて投げつける場合があるかもしれない。とにかく、このやうな形式はまだ最初の企てであるなら、どんなものが出来上るか今は分らないが読者は作品の結果よりも、進行の途中を注意して下されば、私の希望は半ば達したのと同様である。〔下線は引用者による〕

こうした読者の反応を小説の実践に取り込むことを可能にする1つの方法としては「三」で紹介したように、テキストの外から着手することであろう。しかし、読者の持つ常識に挑戦しながら、読者の興味にも配慮しなければならない。1936年2月7日付『読売新聞』第1版に「盛装」の広告がある。「所謂純文芸の視野の狭さはこゝになく、通俗小説の低調からは高く秀て、三人の男性が恋愛と事業と友情と血縁の世界に入り乱れた感情と心理の修羅場を描く！」とあり、読者の興味を誘導する試みだといえよう。

もう1つの方法としては、外地新聞『京城日報』と『台湾日日新報』



で連載すること自体が考えられる。さらには、小稿で論じたように、テキスト内容を開かれたテキストに仕上げることも大切であろう。中村三春が「横光利一の『純粹小説』」で以下のように指摘する。横光は「交流型スタイルとすると、関係論的人物造形」を用い、「しかし」「が」「と思ふと」「けれども」「でも」「急にこのとき」「かうなると」などの接続表現を駆使し、登場人物の交流の中で譲歩、条件、パラドックスを生み出して急展開や意外な展開を導き、登場人物の意向が二転三転する効果を出している。また、「盛装」とは「明治・大正的な物語の定型を用いながら、その定型を相対化する、アナトミー（ジャンルの解剖）的な小説」（中村三春 1994：166）であるとし、読者にとっては「蠱惑的な、不可思議な対象として構成せしめ、しかしそこから離れえず、幾度も幾度も読書行為を再開せしめるような、読書の永久機関」（中村三春 1994：171）だと称する。

ここで、筆者が注目したいのは道長と久平という対照的な親子の組み合わせである。特に久平の人物造形は、たいへん注目に値する。はじめての登場場面で、久平は彼が東京に戻るまでを打ち明けている。

久平は鈴枝の顔や親雄の顔を更はる更はる見比べてみてから、  
「上海からスマトラの方へ行つて来たよ。スマトラへ行くと帰る気がしなくなつてね。もう日本のことはすっかり忘れてしまった。東京はどうかね、変つたか。」〔下線は引用者による〕

また、恋敵道長に逃亡中の生活を詰問された時、久平は言う。

道長はにやりとまた笑ふと、久平の顔を鋭く見詰めた。何か彼の頭の中に、閃き上つて来た複雑な想念に、突然動揺したものらしい。

「君はまだ親父を恨んでゐるのか。」

「いや、どうしてだ？」と久平は訊き返した。

「君はスマトラで、いつたい何なして来たんだい？」

「それは、秘中の秘さ。」

「臺灣にみたと聞いたが、ほんたうか？」

「うむ、あそこにもみたが、すぐ福建へ渡つたよ。」

久平はかういふと、何か質問を避けようとするらしく、不明瞭な表情に変わった道長を見た。

久平と昔情事を交わした菊枝には次のように自分を皮肉っている。

金や女を追つかけるより、まだ面白いよ。あ奴〔引用者注：道長〕は何んて云つたつて、義理や思想なんないんだから、鐵砲で撃てば、それで仕舞ひさ。僕は小母さんとマルキツズムとに追つ拂はれて、スマトラくんだりまで落ちのびたけれども、やうも  
う何もかも忘れつちまつた。〔下線は引用者による〕

この部分は曖昧に書かれている上に、道長を冷やかす感じも匂う。しかし、上海から東京に戻った久平は、その間また台湾に行ったりして、さらに思想問題と銃撃のことに言及している。こうした事柄から、渡辺政之輔を連想させざるをえない。

渡辺政之輔（1899-1928）は日本の社会運動家であり、同時に日本共産党（第二次共産党）違法政党時代の書記長でもある。俗称「渡

政(わたまさ)」。1922年、日本共産党(第一次共産党)の結成の同時に入党。党の再建(第二次共産党)後、中央委員に選ばれ、1927年ソビエト連邦に派遣されて同年テーゼを起草することに関わった。帰国後に党の書記長に選ばれる。1928年他国と連絡する帰途、台湾基隆で総督府の将兵と交戦し、包囲された末銃で自殺したと言われている。

1929年11月6日の『東京日日新聞』によれば、日本共産党中央委員長の渡辺政之輔は1927年9月10日に鍋山貞親と上海で行動を共にした後、鍋山がひとりで上海に滞留し、渡辺は商人の偽装をして1928年10月6日基隆上陸した際、検問を受け、突然警察を射殺してから自殺したという。事件当時、この報道は当局の封鎖を受けたが、翌年ようやく公表された。しかし、自殺というのは日本政府の隠蔽であり、渡辺は銃殺されたという見方もある(恆川信之 1971: 354-355)。

「二」の部分で提示したように、横光とプロレタリア陣営とは呼応関係にある。林淑美「横光利一とプロレタリア文学」の分析によれば、横光は初期から社会主義運動に対して距離を置きつつも関心を抱いていたのである。このような背景を視野に、再び久平の人物造型を分析してみれば、さらなる解釈ができよう。

「俺は一度君と逢つて、ゆつくり話したいと思つてみたんだが、なかなかこれで、用事が多くつてね。君、何かい、もうすっかり、君は例の運動から手を引いたのか。」

「うむ。」と道長は不愉快さうに低く云つた。

「君はどう思ふ。われわれは全く、だらしがないと、君自身思

ふことがあるかね。僕は他人からいくらやつつけられようと、何んとも感じないんだが。」

「そんな事、どうだつていいよ。」

「それぢや、君のこのごろの望みは、いつたい何んだ。」

「まア、かうしてみられることさ。」

「それだけか。」と久平は冷かすやうに、煙草を口にくはへて訊ねた。

「俺はこのごろ、兵隊にいつてみたいんだ。それが駄目なら、外國だね。」

ここでは、マルクス主義者久平は道長を、もう運動に参加しないのかと問い詰めている。道長は嫌味を感じつつも認めた。全文を通して久平は道長に肩身の狭い思いをするコンプレックスを抱えている。唯一久平が優越感を感じられるのは、たとえそれがすでに昔の勲章になってしまっても、自らマルクス主義思想に傾倒し、運動に参加したというプライドを持っていることである。お露が死にかかったと知った時、栄子にこう自慢している。「僕もこつそり行つたが、僕にはマルキシズムの理論だけがあつて、金がなかつたから、救つてやらうにも救へない」〔下線は引用者による〕。

他方では、台湾やスマトラなどの(準)外地は、逃亡先でもあり、精力を備蓄する場所にもなっている。すなわち、道長と対決するための資源を得て再び日本の舞台に舞い戻るための踊り場でもあるのだ。究極に解釈すれば、公権力の秩序に反抗する企みも内包していると言えるかもしれない。

僕はスマトラへ行つて来て、……日本へ帰れば、壘地で獲得し

て来たエネルギーが、個人を支配する秩序の繩に、どれだけ反抗出来るかひとつ暴れて見てやりませうと、かういふ覺悟をして帰つて来ただけであるよ。〔下線は引用者による〕

そのほか、久平がスマトラの材木会社に入社し、今度は日本支店の支店長として東京に派駐されてきたという設定も興味深い。

「……當分、東京に今度は落ちつけるよ。スマトラの材木会社へ這入つてしまつて、こつちの支店長といふ出世でね。どうして、なかなか。」と久平は云ふと、振り返つて人もなげに大きな声で快活に笑つた。

戦前インドネシアはオランダ領植民地だったが、その資源の豊かさにより、日本資本も開発に加わっていた。オランダがスマトラを領有するのは主に資本経済面で利益を獲得しようとしたためである。それゆえ、日本を含む、英・米・独・法・伊などの外国資本を導入している。300年の統治を経ても、現地の土着民は依然として原始生活を送っている。林業の部分は、原則的にすべてオランダの所有だが、政府の用材以外、すべて民間の個人や企業に開発を委託している（濱田恒一 1944：213-346）。

以上の考察から分かるのは、久平が左翼運動に参加し、台湾やスマトラなどの（準）植民地へ逃亡したという設定は、横光の左翼運動への同調に由来するといえよう。またそれは渡辺政之輔をモデルとした可能性も高い。ただ、政府による検閲への配慮のためか、横光は久平にスマトラへも行かせて、不遜な性格とし、好感度の低い人物に仕上げたのであろう。このような人物造形は、植民地に社会

の周縁を生きる人々にとっての“踊り場”としての可能性があることを示唆しているし、台湾が近代理性（道長）と対比する修辭として捉えられていることが分かる。

## 五、終りに

以上が、台湾で発行された新聞小説「天使」、及び台湾が登場する小説「雅歌」「盛装」に対する筆者の分析である。

総じて言えば、純粋小説群の新聞小説「雅歌」「盛装」における外地としての「台湾」は、登場する中産階級の生活の“ネガ”なのである。植民地台湾や朝鮮、南洋にある産業は、彼らの自由恋愛を支える経済力の源の1つになっている。第一主人公の羽根田と道長を引きたてるのは、第二主人公の鬼頭と久平である。鬼頭と久平には、日本石油の台湾株を持っている、左翼運動に参加したため台湾へ逃亡したといった境遇の差異こそあっても、台湾が人物造形や近代理性を刺激する修辭として使われている点では同様である。

1930年に発表された「雅歌」においては、台湾は株取引投機家の植民地になっているに過ぎず、ここでの台湾は横光利一にとって、単なる植民地のシンボルとしての意味が、表象する対象としての意味よりも大きいとも言えよう。

しかし5年後の1935年、横光は純粋小説群の理論的根拠として「純粋小説論」を発表した際、日本文学の新しい文体の誕生を促すために、台湾をはじめとする外地読者市場を選び、はじめての新聞小説「天使」を掲載して、実験を行った。作品中に台湾の直接描写は無いが、横光の分身でもある「天使」を通じて、台湾に「純粋小説論」

への関心を掻き立て、影響を与えた。

また、「雅歌」「盛装」など直接台湾に触れた作品が書かれたとき、小説の自由恋愛の追求と同時に行われたのは、南方の養分を摂取・吸収するための植民地の開発と拡張である。中産階級青年の恋愛を中心に描く「盛装」では、台湾は度々第2主人公である久平への修辭となっている。言い換えれば第一主人公道長の位置を際立たせるための、対照的な“他者”の象徴ともなっている。横光利一の実際の台湾体験は、常に間接的ですし違ひもあった。そのため、台湾への想像は紋切的な感じがする。だが当時の事実を忠実に踏まえている。黒田大河がかつて指摘したいように、外地朝鮮や支那、ヨーロッパは横光文学にとっては完全なる「他者」であり、参照点である。しかし、台湾は横光文学にとっては「他者」ならぬ「他者」への修辭である。周縁との出会い、純粋なシンボルなのである。

### 参考文献

・日本語

石田仁志、渋谷香織、中村三春編

2006 『横光利一の文学世界』。東京：翰林書房。

岩上順一

1956 『横光利一』。東京：東京ライフ社。

位田将司

2007 「横光利一『純粹小説論』の『交互作用』：複数の弁証法をめぐって」。『文藝と批評』、95：45-59。

掛野剛史

2006 「横光利一年譜補訂：付『定本横光利一全集』未収録文章」。『横光利一研究』、4：119-134。

神谷忠孝編

1991 『日本文学研究大成 横光利一』。東京：国書刊行会。

河上徹太郎

1951 「解説」。横光利一『横光利一作品集 第4巻』、東京：創元社。

川端康成

1982 『川端康成全集 第29巻』。東京：新潮社。

菅野昭正

1991 『横光利一』。東京：福武書店。

栗原幸夫

2004 『プロレタリア文学とその時代増補新版』。東京：インパクト出版会。

佐々木基一

1953 「『文藝復興』期批評の問題」。『文学』、21(6)：30。

1958 「文芸復興期の問題」。『文学』、26(4)：9。

佐藤卓己

2002 『「キング」の時代：国民大衆雑誌の公共性』。東京：岩波書店。

下村作次郎

1999 「台湾藝術研究会の結成：『フォルモサ』の創刊まで」。『左連研究』、5：31-46。

謝惠貞

2012 「【資料紹介】『定本横光利一全集』未収録随筆「台湾の記憶」その他：『台湾日日新報』における横光利一」。『横光利一研究』、13：95-111。

竹本伊一郎

1932 『台湾株式年鑑』。台北：台湾經濟研究会。

田中保隆

1981 「昭和前期の文芸思潮」。日本文学研究資料刊行会編『昭和の文学』、pp. 14-18。東京：有精堂。

谷沢永一

1962 「昭和期文芸評論史の結節点：『文芸復興』期評価史覚書」。『国文学：解釈と教材の研究』、7 (10) : 104-109。

張文薫

2005 「植民地プロレタリア青年の文芸再生：張文環を中心とした『フォルモサ』世代の台湾文学」。東京：東京大学大学院人文社会系研究科博士論文。

恆川信之

1971 『日本共産党と渡辺政之輔』。東京：三一書房。

中島利郎

2006 「日本統治期台湾文学研究『台湾文芸家協会』の成立と『文芸台湾』：西川満『南方の烽火』から」。『岐阜聖徳学園大学紀要：外国語学部編』、45 : 91-108。

中村光夫・白井吉見・平野謙

1967 『現代日本文学全集別巻：現代日本文学史』。東京：筑摩書房。

中村三春

1994 「横光利一の『純粹小説』」。中村三春『フィクションの機構』、pp. 162-171。東京：ひつじ書房。

夏目伸六編

1948 『夏目漱石賞當選作品集』。東京：櫻菊書院。

西川満

1983 『わが越えし幾山河』。東京：人間の星社。

1988 「煉獄のころ」。『アンドロメダ』、12月号。

日本石油史編輯室編

1958 『日本石油史』。東京：日本石油株式会社。

野村喬

1962 「転向文学始末」。『国文学：解釈と教材研究』、7 (10) : 41-46。

濱田恒一

1944 『南方經濟資源総攬 第10巻：ジャワ・スマトラの經濟資源』。東京：日本経国社。

平浩一

2007 「読者意識の源泉：直木三十五に遡る『文芸復興』期の文学状況」。『文藝と批評』、95 : 37-44。

2008 「戦後批評と『文芸復興』生成期：一九五〇年代における平野謙の文学史観を中心に」。『文藝と批評』、98 : 55-63。

藤川能

1981 『わが巨匠たち：回想の文芸科』。東京：緑地社。

山本芳明

2010 「それは『純粹小説論』から始まった：『純文学』大衆化運動の軌跡」。『学習院大学文学部研究年報』、56 : 41-73。

横光利一

1982 『定本横光利一全集 第14卷』。東京：河出書房新社。

1983 『定本横光利一全集 第15卷』。東京：河出書房新社。

林淑美

1983 「横光利一とプロレタリア文学」。『国文学解釈と鑑賞』、48(13)：39-45。

1988 「芸術大衆化論争における大衆」。有精堂編集部『講座昭和文学史：第一巻都市と記号』、pp. 42-47。東京：有精堂。

・中国語

柳書琴

2001 「荊棘之道：旅日青年の文學活動與文化抗爭」。國立清華大學中國文學系博士論文。

陳芳明

1998 「第六章 史芬克司的殖民地文學：『福爾摩沙』時期的巫永福」。『左翼台灣：殖民地文學運動史論』、pp. 121-140。台北：麥田出版。

彭小妍編

1998 『楊逵全集 第9卷』。台北：國立文化資產保存研究中心籌備處。

趙勳達

2009 『「文藝大衆化」の三線糾葛：一九三〇年代台灣左、右翼知識份子與新傳統主義者的文化思維及其角力』。台南：國立成功大學台灣文學研究所博士論文。

## 付録



図1 「臺灣の記憶」(台湾日日新報 1938.5.1、第9版)。

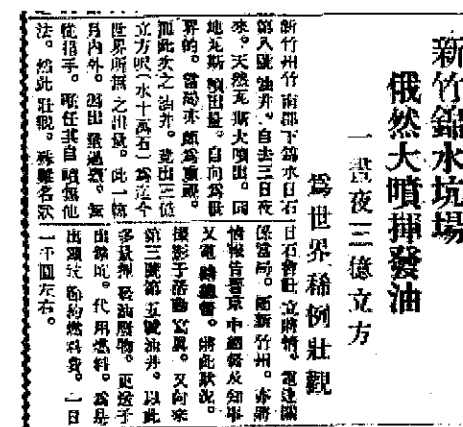


図2 「新竹錦水坑場／俄然大噴揮發油／一晝夜三億立方／為世界稀例壯觀」(漢文台湾日日新報 1928.11.7 夕刊、第4版)。

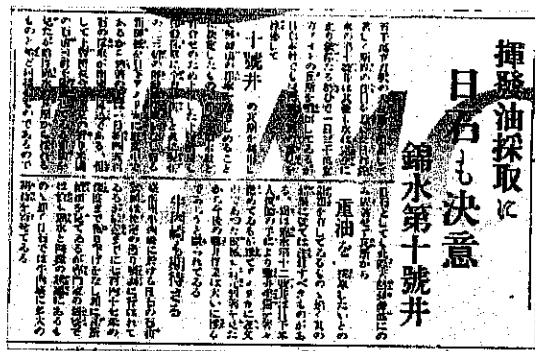


図3 「揮發油採取に／日石も決意／錦水第十號井」 (台湾日日新報 1930.4.26、第7版)。

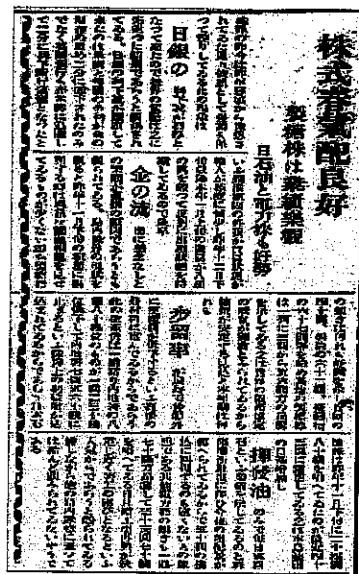


図4 「本島の鑛産界／石炭は減少、揮發油は増産／鑛の移出は躍進的増加／本島の出炭」 (台湾日日新報 1930.10.8、第3版)。



図5 「株式春氣配良好／製糖株は業績樂觀／日石油と電力株も好勢／揮發油」 (台湾日日新報 1931.1.22、第3版)。





後退費法 期賦與主定 林手地配積内 越常交常立 余金費金金	● 前本利再稅財差 合期期益差引合入 粹純處引純債債 野金分益金期金	買漏倉歩地運荷容藥燃 原洩敷元 遺器 料油費料油費投費品料
1,000,000 1,000,000 1,000,000 1,000,000	1,000,000 1,000,000 1,000,000 1,000,000	1,000,000 1,000,000 1,000,000 1,000,000
1,000,000 1,000,000 1,000,000 1,000,000	1,000,000 1,000,000 1,000,000 1,000,000	1,000,000 1,000,000 1,000,000 1,000,000

図 6-3 竹本伊一郎 (1932 : 265)

### 大正博覧会「台湾館」の観方 —志賀直哉を中心に—\*

郭南燕\*\*

#### 一、はじめに

1894年の日清戦争後、台湾は清国から割譲され、1895年から日本の領土とされた。植民地台湾が日本近代文学の中でどのように描かれたかについては、すでに研究され、台湾がいかに日本主催の博覧会で展示されたかについても考察されている。しかし、管見では日本の作家が、博覧会の「台湾館」で何を観、何を考え、何を書いたのかについてはあまり調査されていないようである。

本稿は、小説家志賀直哉（1883-1971）が1914年に東京で開催された大正博覧会の台湾館で展示された台湾学生の作文をどのように評価していたかを検討し、台湾館が日本の近代文学に残した痕跡を位置づけることを目的とする。

\* 本研究を発表した時に受けた台湾中央研究院の陳璋芬氏、東京大学の藤井省三氏、横浜国立大学の垂水千恵氏のコメントに謝意を表す。

\*\* 国際日本文化研究センター准教授。

---

中央研究院人文社會科學研究中心專書（63）

日本文學中的臺灣  
日本文学における台湾

主 編：張季琳

出 版 者：中央研究院人文社會科學研究中心

發 行 者：中央研究院人文社會科學研究中心

編輯校對：簡心怡 森田健嗣

封面圖片：立石雅夫先生提供

定 價：平裝 400 元

售書地點：中央研究院人文社會科學研究中心（出版室）

臺北市南港區研究院路 2 段 128 號

電話：（02）2789-8143 傳真：（02）2782-8157

印 刷 者：文盛彩藝事業有限公司

100 臺北市中正區廈門街 34 巷 19 號 1 樓

電話：（02）2369-6300

初 版：中華民國一〇三年十月

平 裝：ISBN：9789860425093 GPN：1010301891

---

版權所有 不准翻印